さざんか

かとう学園　宗像市立河東中学校
学校通信第32号（R5. 10. 18）

　キンモクセイのかすかな香りが風に乗ってかおる季節となりました。一年中で最も過ごしやすい季節といえるでしょう。芸術の秋、読書の秋、食欲の秋など様々に表現されてきた実りの秋です。
　河東中学校では、先週末の文化祭・合唱コンクールを終え、集団づくりの成果を実生活に活かしながら、次の目標に向かって気持ちよく切り替えをしているところです。勉強に、受験に、部活動やクラブチームに目標を新たに定めて再始動しています。さっそくその成果が現れてきているので一部を紹介します。

陸上部男女は新人戦・県大会でも活躍してきました！

　文化祭の翌日、博多の森陸上競技場で第41回福岡県中学校新人陸上競技大会が開かれました。この大会で筑前地区新人大会を勝ち抜いた本校陸上部員男女が多数出場しました。その中で、入賞した選手を紹介します。
　男子 200m7 位・綿島 稜毅さん　男子 400m2 位・田中 信さん　男子 110mH4 位・藤井 庵士さん
　男子 4X100mR6 位・園田 優月さん、綿島 稜毅さん、田中 信さん、藤井 庵士さん
　男子砲丸投 8 位・原 閤汰さん

新体操部は筑前地区大会で躍動しました！

　10 月 14 日（土）那珂川市民体育館において、第40回筑前地区中学校新人新体操競技大会が開催されました。この大会に本校生徒の 8 年生・樋口 美紅さん、内山 柚良さん、7 年生・川内 愛永さんの 3 名が出場しました。川内さんは、1 年生の部で個人総合５位に入賞しました。県大会進出は４位以内ですので惜しくも県大会の切符を手にすることはできませんでしたが健闘しました。3人は、夏の大会ではさらに順位を上げていくことでしょう。

授業研修の風景

先生たちも気持ちを切り替え、授業に専念し学力の向上を目指しています。
今週は 3 本の授業研修が予定されています。

安部先生（国語）

10 月 17日（火）7年2組で行われた安部先生による国語科書写の公開授業。
永年にわたって築き上げられたベテランの授業技法が惜しみなく公開されました。

　学問の重要な手法の一つに“比較”という方法があります。比較の効果的な方法を、楷書と行書の比較ということで授業が展開されました。楷書との比較を通して行書の特徴を洗い出します。さらに、行書を実際に筆で書くことにより実感します。安部先生の書道実演には拍手がわきました。さすがに永年にわたる授業の腕は見事なものです。

「がまんが大切だね。人間はがまんしないと。」

～東京の新橋駅前で５０年以上靴磨(くつみが)き職人として働くおばあちゃん～

東京の新橋の駅前広場で靴磨きを 50 年以上続けているおばあちゃんがいます。彼女の手にかかるとどんなひなびた靴もあっという間に息を吹き返しピカピカになって躍動します。磨かれた靴の主人は、「今日も仕事をがんばるぞ!」「明日も一日この靴で一生懸命働こう!」という気持ちになる魔法の靴磨きです。

中村幸子さん 92 歳。40 歳で始めた靴磨きは現在も現役で都会のあわただしいなかで続いている。おばあちゃんに 500 円がわたされると、くたびれた靴も 15 分で元気を取り戻す。お客さんの中には、靴を磨いた後に商売がうまくいったり、貧乏だったのに社長になったりという話は山ほどある。おばあちゃんに磨いてもらうといいことがあるといううわさがある。まさに魔法の靴磨きだ。

おばあちゃんの靴磨きは、他とは少し違う。ふつうは靴墨（くつずみ）を布につけて磨くが、おばあちゃんは直接手で靴に塗り込んでしみこませる。だから、靴の皮に浸透し光沢をよみがえらせる。おばあちゃんは、「自分の手は汚れたら洗えばいいでしょ。それよりお客さんの靴がきれいになるほうがいいの。でも、そのおかげで指紋がなくなっちゃったの。」と語っている。

昔は終電まで座り続けて、一日百人くらい磨いていた。近年は減りはしたが、それでも三十人くらいは磨いている。東京だけでなく北海道や外国からくるお得意さんもいる。

おばあちゃんは、昭和6年静岡県で生まれた。東京にあこがれていた若いころ、19歳でトランク一つ抱えて上京する。東京に着いたとたんにトランクを盗まれ、行商をしたりして食いつないでいく。そんなある日、公園で酔っぱらいに絡まれている時に、足の悪い男性に助けられる。やがて二人は夫婦になり、五人の子どもを授かる。しかし、体の不自由な夫は働くことができず、中村さんがリヤカーで果物を売り歩いて家族を養った。その仕事は果物をたくさん積んで引くので、足腰がパンパンになり体は限界になった。そんな時に、果物をよく買ってくれたある女性から靴磨きをすすめられた。

最初はすごく恥ずかしかったし、怖くてなかなか広場に出られなかった。それに、古い人がいい場所をおさえているから、新人はほかの人が切り上げてからやっと仕事ができた。昼間に仕事ができるまでに 3 年かかった。

家計がやっと安定してきたのは、靴磨きを始めて10年くらいたってからだった。ご主人がなくなったのもそのころで、まだ 58 歳だった。

おばあちゃんは、50年にわたる職人生活をこう振り返ります。「少々かぜをひいたくらいじゃ休みませんでした。大雪が降って、雪だるまみたいになりながら仕事をした日もありますよ。手が凍るくらいに冷たくて、涙をこらえながら靴を磨いたけど、やめようとは思わなかった。がまんが大切だね。人間はがまんしないと。」

おばあちゃんは、長い靴磨きの経験の中で、このお客さんはどんな人か靴を磨きながら15分もあればわかるそうです。靴底の減り方、削れる場所、お客さんの目、話し方や服装、そういったもので職業や役職、生活背景などおおよそのことがわかることが多いそうです。悩みを抱えているお客さん、待ち合わせをしていてウキウキしている足もと、全部わかってしまうそうです。それが仕事の経験知というものでしょう。

おばあちゃんはこう言います。「ここまで生きてこられたのは、お客さんのおかげ。人間、ひとりじゃ生きられないですから。皆さんが親切にしてくださって、助けてくださったからここまでこられたんです。靴磨きを始めて本当に良かったと思う。これからもお客さん一人一人を大切にして、死ぬまで靴磨きを続けていきますよ。」

何かを続けるということはむずかしく、でも大切なことです。人間は飽きやすく、同じことを繰り返すのはたいへんなことです。ましてこのおばあちゃんのように50年以上同じ仕事を続けることは並大抵のことではないでしょう。おばあちゃんが靴磨きをやり続けているのは、もちろん生活のためもあるでしょう。しかし、自分の仕事で喜んでくれる人、助かる人の存在が支えてきたのではないでしょうか。“継続は力なり” という言葉がありますが、このおばあちゃんがそのことを物語っています。人間は、死ぬまで何か一つでも続けられることがあれば本当に幸せなことなのではないでしょうか。